新連載 講座 INTRODUCTION OF NEW SERIES

— 新連載にあたって —

# 近時の判例で学ぶ刑法

「刑法の学修の際には最近の判例を押さえておく必要がある」ということは，学生のみなさんもしばしば耳にされていると思う。しかし，判例の事実関係と判旨だけを確認すれば，判例を学んだことになるわけではない。判例の意義を理解するためには，従来の判例・学説の展開を把握した上で，当該判例をその流れの中に位置づけることが不可欠である。それによって，当該判例が従来の議論とどのような関係に立つのか，何らかの新しい視点を付け加えるものといえるかを正確に理解することができる。そして，新しい判例を学ぶことによって，従来の学説の議論の意義やその課題を改めて確認することができる。このように判例と学説を有機的に関連付けることが，まさに刑法の学修の理想といえるだろう。とはいえ，「言うは易く行うは難し」であり，このような学修を１人で進めることは簡単なことではない。

今回の企画は，まさにこのような学修をサポートすることを目的としたものである。これから２年間の連載では，2009（平成21）年11月から2022（令和４）年４月までの間の重要な最高裁判例24件を取り上げて，それぞれの判例の趣旨や解釈論上の意義，従来の判例・学説との関係などについて分かりやすく解説していただく予定である（干支の一回りだと何となく区切りがよいが，少しはみ出てしまった）。近時の重要判例の内容を確認できるだけではなく，関連する解釈論上の論点について改めて深く学ぶことも可能になるという意味で，大変欲張りな企画である。24名の先生方にリレー形式で御執筆をお願いすることにしたが，ご担当の先生方はいずれも，これからの刑法の研究を牽引すべき中堅・若手の研究者の方々である。お忙しいところ，企画の趣旨にご賛同いただき，快くお引き受けいただいたことに厚く御礼を申し上げる。

判例の分析といっても，確固たる「正解」があるわけではなく，複数の解釈の可能性が残されている場合も少なくない。判例を解釈すること自体が，刑法理論に関する知見に基づく創造的な営為ということができる。読者のみなさんにおかれては，この連載を通して，刑法解釈の面白さをぜひ味わっていただきたい。私自身，読者の1人として大変楽しみにしている。

（橋爪　隆）

## 予定テーマと担当者

| NUMBER | THEME | AUTHOR |
|---|---|---|
| 第1回 | 正当防衛における侵害の急迫性（最決平成29・4・26刑集71巻4号275頁） | 坂下陽輔 |
| 第2回 | 殺人罪における未必の故意（最判令和3・1・29刑集75巻1号1頁） | 大庭沙織 |
| 第3回 | 過失犯における結果回避義務（最決平成24・2・8刑集66巻4号200頁） | 山本紘之 |

| NUMBER | THEME | AUTHOR |
|---|---|---|
| 第4回 | 責任能力と精神鑑定（最決平成21・12・8刑集63巻11号2829頁） | 竹川俊也 |
| 第5回 | 窃盗罪の実行の着手（最決令和4・2・14刑集76巻2号101頁） | 品田智史 |
| 第6回 | 殺人罪の間接正犯・共同正犯（最決令和2・8・24刑集74巻5号517頁） | 小島陽介 |
| 第7回 | 危険運転致死傷罪の共同正犯（最決平成30・10・23刑集72巻5号471頁） | 小島秀夫 |
| 第8回 | 過失犯の共同正犯の成否（最決平成28・7・12刑集70巻6号411頁） | 佐藤輝幸 |
| 第9回 | 詐欺未遂罪の承継的共同正犯（最決平成29・12・11刑集71巻10号535頁） | 仲道祐樹 |
| 第10回 | 危険運転致死傷罪の幇助犯（最決平成25・4・15刑集67巻4号437頁） | 佐川友佳子 |
| 第11回 | 中立的行為と幇助犯（最決平成23・12・19刑集65巻9号1380頁） | 西貝吉晃 |
| 第12回 | 包括一罪の成否（最決平成26・3・17刑集68巻3号368頁） | 田中優輝 |
| 第13回 | 保護責任者遺棄致死罪の成否（最判平成30・3・19刑集72巻1号1頁） | 佐野文彦 |
| 第14回 | 傷害の意義（最決平成24・7・24刑集66巻8号709頁） | 天田　悠 |
| 第15回 | 同時傷害の特例と一部共犯関係（最決令和2・9・30刑集74巻6号669頁） | 玄　守道 |
| 第16回 | 強制わいせつ罪における性的意図（最大判平成29・11・29刑集71巻9号467頁） | 佐藤陽子 |
| 第17回 | ポスティングと住居侵入罪の成否（最判平成21・11・30刑集63巻9号1765頁） | 薮中　悠 |
| 第18回 | 名誉毀損罪における真実性の誤信（最決平成22・3・15刑集64巻2号1頁） | 穴沢大輔 |
| 第19回 | 親族相盗例の適用（最決平成24・10・9刑集66巻10号981頁） | 徳永　元 |
| 第20回 | 詐欺罪における欺罔行為（最決平成26・4・7刑集68巻4号715頁） | 冨川雅満 |
| 第21回 | 横領罪における委託関係（最判令和4・4・18裁判所Web） | 足立友子 |
| 第22回 | 証拠偽造罪の成否（最決平成28・3・31刑集70巻3号58頁） | 東條明徳 |
| 第23回 | 犯人隠避罪の成否（最決平成29・3・27刑集71巻3号183頁） | 荒木泰貴 |
| 第24回 | 賄賂罪における職務関連性（最決平成22・9・7刑集64巻6号865頁） | 遠藤聡太 |